

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県における家庭科教育の実態（第3報）： 中学校技術・家庭科保育領域の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宜保, 美恵子, 亀谷, 末子, 浅井, 玲子, Gibo, Mieko, Kameya, Sueko, Asai, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1536

沖縄県における家庭科教育の実態（第Ⅲ報）

— 中学校技術・家庭科保育領域の場合 —

宜保 美恵子・亀谷 末子・浅井 玲子

Conditions of Homemaking Education in Okinawa Prefecture (3) — A case of Early Childhood and Case Field in the Industrial Arts and Home Economics —

Mieko GIBO* Sueko KAMEYA** Reiko ASAI***

(Received April 30, 1997).

I はじめに

平成元年3月15日告示の学習指導要領において、家庭科は小学校から高等学校まで一貫して男女必修の教科となった。

中学校技術・家庭科における男女必修に至る経過をみると、これまでは、「男子向き」「女子向き」に区分し、男子には「男子向き」を、女子には「女子向き」を必修として履修させていた。

しかし、昭和52年7月23日告示の学習指導要領¹⁾から「男子向き」「女子向き」の内容上の重複を整理して領域を17領域(A～I)に再構成し男女の別をやめ、便宜上、A～Eまでの領域を「技術系列」、F～Iまでの領域を「家庭系列」とした。履修方法としては、A～Iまでの17領域の中から男女のいずれにも、7領域以上履修させるものとした。その場合、男女相互の理解と協力を図る観点から、男子には技術系列に加えて、家庭領域から1領域、女子には家庭系列に加えて、技術系列から1領域を含めて、履修させるように定められた。ここに、技術・家庭科の成立以来、男女別系列の学習を行って約20年を経て、ようやく、わずかながらでも男子の家庭科学習が実現できることは一歩前進と言える²⁾。

平成元年3月15日告示の学習指導要領³⁾では、新たに「情報基礎」及び「家庭生活」の2領域が設けられ、改定前の17領域について基礎的・基本的な内容の指導の徹底を図る観点から統合整理し、合わせて11領域で構成された。

履修方法は、A～Kまでの11領域から7領域を履修させる。その場合、「A木材加工」、「B電気」、「G家庭生活」、及び「H食物」の4領域についてはすべての生徒に履修させることになった。このよに社会の変化や家庭の機能の変化等に対応すべく新たな領域が設けられた。従来の男女役割分業に基づく伝統的な家庭科教育から、家庭生活は男女が協力して築いていくものであるという視点に立つ家庭科教育へと大きく転換した。具体的には、前報⁴⁾でも述べたように家庭科は「人間として生きていくための基礎となる教科の一つとして」位置づけられ、また、「男女ともに生活者として自立できる人間を育成する」上からも男女ともに必修とすることの必要性が社会的にも認められたのである。

このような、家庭科に対する社会的要請に対して、本県の家庭科教育の実態はどのようになっていだろうか。

今回は、技術・家庭科の「保育」領域について

* Home Econ, Coll. of Edu, Univ. of the Ryukyus

** Home Econ, Coll. of Edu, Univ. of the Ryukyus (Part-time Lecturer)

*** Okinawa Prefectural Koza High school

- ① 家庭科の新たな方向性に即した教育がなされているだろうか。
- ② 小・中・高一貫性の観点に立った指導が、各学校段階で確立されているだろうか。
- ③ 郷土の生活の実態に即した題材が適切に取り入れられているだろうか。

この3点を踏まえ、今後の沖縄県の家庭科教育の望ましいあり方について、その方向性の一端を提案できればと思います、中学校技術・家庭科の担当教師を対象に実態調査を行い、以下の結果を得たので報告する。

II 調査の概要

- 1. 調査方法：技術・家庭科の「保育」領域について、担当教師対象にアンケート調査を実施した。
- 2. 調査の期間：1996年7月～8月
- 3. 調査対象、属性人数及び回収率は、表1の通りである。

県下の中学校の技術・家庭科担当教諭156人を対象にアンケート調査を実施した。有効資料88人について分析を行った。回収率は56.4%で低かったが、過半数を越えた回答があったので一定の方向は把握できるものと判断した。

表1 調査対象及び属性人数（中学・保育）

	配付数	回収数	有効資料数
国頭	32人	17人	16人
中頭	36	28	25
那覇	28	11	11
島尻	24	17	16
宮古	17	8	8
八重山	19	12	12
合計	156	93	88
回収率	(100.0%)	(59.6%)	(56.4%)

III 結果及び考察

1. 基本的属性

1) 家庭科の免許所持の有無

全体的には、家庭科の免許を持っているのが71.6%を占めているが、家庭科の免許を持たずに教えているのが28.4%と3割近くを占めている。

地域別では、中頭、島尻、那覇地区はそれぞれ96.0%、87.5%、81.8%で8割以上が免許を持っているが、八重山は、逆に免許を持たないのが66.7%の6割強を占めている。次いで、宮古、国頭は各50.0%であった。

県教育庁の調査によると、年度によって異なるが中学校の場合、平成7年度は教員190人中、免許外教員は62人で32.6%、平成8年度は198人中54人で27.3%を占めていた。

県では、この免許外教員に対して各教育事務所単位で研修を行っている。このように家庭科の側からみると、家庭科を担当する免許外教員は3割前後を占めている。

一方、本調査の場合、家庭科の教員が免許外その他教科を担当していると回答したのは、21人24.0%で、その内訳は、国語6人、音楽5人、英語4人、数学、社会、特殊が各々2人であった。地域的には、国頭6校、八重山4校、中頭、那覇は各々3校、島尻、宮古は各々2校であるが、ほとんどが離島や僻地の小規模校であった。

表2 家庭科の免許所持の有無（中学・保育）

総数	総数 88 (100.0)	はい 63 (71.6)	いいえ 25 (28.4)
国頭	16 (100.0)	8 (50.0)	8 (50.0)
中頭	25 (100.0)	24 (96.0)	1 (4.0)
那覇	11 (100.0)	9 (81.8)	2 (18.2)
島尻	16 (100.0)	14 (87.5)	2 (12.5)
宮古	8 (100.0)	4 (50.0)	4 (50.0)
八重山	12 (100.0)	4 (33.3)	8 (66.7)

2) 家庭科担当者の身分

家庭科担当者の身分は、教諭85.1%で8割強を占めている。臨時的任用は少なく8.0%、非常勤講師は6.9%となっている。地区別でも同様の傾向にあるが、中頭の場合、非常勤講師の割合が多く20.0%を占めている。

表3 家庭科担当者の身分(中学・保育)

	総数	教諭	臨任	非常勤講師	不明
総数	88 (100.0)	74 (85.1)	7 (8.0)	6 (6.9)	1 -
国頭	16 (100.0)	13 (86.7)	2 (13.3)	-	1
中頭	25 (100.0)	19 (76.0)	1 (4.0)	5 (20.0)	-
那覇	11 (100.0)	10 (90.9)	1 (9.1)	-	-
島尻	16 (100.0)	13 (81.3)	3 (18.8)	-	-
宮古	8 (100.0)	7 (87.5)	-	1 (12.5)	-
八重山	12 (100.0)	12 (100.0)	-	-	-

() %

3) 家庭科担当者の経験年数

家庭科担当者の経験年数は、16年以上が最も多く51.7%で過半数を占めている。次いで、2～5年の17.2%、6～10年13.8%、11～15年9.2%の順であった。地区別では、国頭、那覇、中頭は全体と同様の傾向にあり、それぞれ66.7%、63.6%、56.0%で過半数を占めているが、島尻は、16年以上は37.5%で4割未満、2～5年25.0%が高く経験年数の幅が広い。八重山は、他地区と異なり6～10年が82.3%で最も多く経験年数の短い教員が多い傾向にある。

表4 家庭科担当者の経験年数(中学・保育)

	総数	～1年未満	2～5	6～10	11～15	16～
総数	87 (100.0)	7 (8.0)	15 (17.2)	12 (13.8)	8 (9.2)	45 (51.7)
国頭	15 (100.0)	1 (6.7)	2 (13.3)	2 (13.3)	-	10 (66.7)
中頭	25 (100.0)	3 (12.0)	4 (16.0)	2 (8.0)	2 (8.0)	14 (56.0)
那覇	11 (100.0)	1 (9.1)	1 (9.1)	2 (18.2)	-	7 (63.6)
島尻	16 (100.0)	2 (12.5)	4 (25.0)	2 (12.5)	2 (12.5)	6 (37.5)
宮古	8 (100.0)	-	-	3 (37.5)	2 (25.0)	3 (37.5)
八重山	12 (100.0)	-	4 (33.3)	1 (8.3)	2 (16.7)	5 (41.7)

() %

4) 家庭科担当者の年齢

家庭科担当者の年齢は、50代が多く40.0%、次いで30代21.8%、20代は20.7%、40代16.1%の順であった。地区別では、宮古、八重山、島尻以外は50代が最も多く、那覇63.6%で6割以上、他は、中頭48.0%、国頭40.0%であった。宮古は30代が62.5%を占め、八重山は40代が多く33.3%、全体的に都市地区は年齢が高く、離島や国頭地区は低い傾向にあった。

表5 家庭科担当者の年齢(中学・保育)

	総数	20代	30代	40代	50代	60代
総数	87 (100.0)	18 (20.7)	19 (21.8)	14 (16.1)	35 (40.0)	1 (1.1)
国頭	15 (100.0)	3 (20.0)	2 (13.3)	4 (26.7)	6 (40.0)	-
中頭	25 (100.0)	6 (24.0)	3 (12.0)	3 (12.0)	12 (48.0)	1 (4.0)
那覇	11 (100.0)	1 (9.1)	3 (27.3)	-	7 (63.6)	-
島尻	16 (100.0)	5 (31.3)	3 (18.8)	3 (18.8)	5 (31.3)	-
宮古	8 (100.0)	-	5 (62.5)	-	3 (37.5)	-
八重山	12 (100.0)	3 (25.0)	3 (25.0)	4 (33.3)	2 (16.7)	-

() %

2. 家庭科の指導の実態

1) 家庭科の指導体制

家庭科の指導体制は、「1人で指導」しているのが59.6%で最も多く、次いで、「2人で指導」が13.6%、「家庭科と他教科の指導を兼ねている」25.0%となっている。先に述べた免許外教科の担当が多かったことと関連している。免許外教科の担当問題は、小規模校の抱える大きな課題であるが、当該教科の教育目標や内容等を十分に把握して指導に当ることを期待したい。

表6 家庭科の指導体制(中学・保育)

	総数	1人で指導	2人	家庭科+他教科	2人+他教科	1人+他教科	その他
総数	88 (100.0)	52 (59.6)	12 (13.6)	11 (12.5)	5 (5.7)	6 (6.8)	2 (2.3)
国頭	16 (100.0)	8 (50.0)	1 (6.3)	4 (25.0)	3 (18.8)	-	-
中頭	25 (100.0)	19 (76.0)	3 (12.0)	1 (4.0)	1 (4.0)	1 (4.0)	-
那覇	11 (100.0)	5 (45.5)	3 (27.3)	-	-	3 (27.3)	-
島尻	16 (100.0)	9 (56.3)	4 (25.0)	1 (6.3)	1 (6.3)	-	1 (6.3)
宮古	8 (100.0)	4 (50.0)	1 (12.5)	1 (12.5)	-	1 (12.5)	1 (12.5)
八重山	12 (100.0)	7 (58.3)	-	4 (33.3)	-	1 (8.3)	-

() %

2) 保育領域の履修学年

保育領域の履修学年は、3学年での履修が97.3%と圧倒的に多く、1学年及び2学年での指導は中頭に各1校のみであった。

表7 保育領域の履修学年(中学・保育)

	総数	1学年	2学年	3学年
総数	73 (100.0)	1 (1.4)	1 (1.4)	71 (97.3)
国頭	14	-	-	14
中頭	22	1	1	20
那覇	9	-	-	9
島尻	12	-	-	12
宮古	5	-	-	5
八重山	11	-	-	11

数字=実数

3) 保育領域の授業時数

保育領域の授業時数は、全体的には20~25時間を当てているのが多く48.7%、次いで、35時間以上が24.4%、26~30時間14.1%と、ほとんどが20時間以上を当てているが、19時間以下が11.5%あった。

最近の中学生は家庭においては、きょうだい数が少なく弟妹の世話をする機会もない。また、地域社会においても同様に幼少の子ども達との接触経験が得られない状況にある。そのために、おやつや絵本作りの実習だけでなく幼稚園や保育所等における体験学習が必修ではないかと思われる。

中学校指導書技術・家庭編⁹⁾によると、各領域に担当する授業時数については、「G家庭生活」及び「H食物」の各領域はそれぞれ35単位時間を標準とし、それ以外の各領域はそれぞれ20単位時間から30単位時間までを標準とするとなっている。

先にも述べたように、幼稚園や保育所での体験学習、実習等を取り入れると19時間以下では無理な面があると思われる。

表8-1 保育領域の授業時間数(中学・保育)

	総数	19時間以下	20~25	26~30	31~34	35~
	78 (100.0)	9 (11.5)	38 (48.7)	11 (14.1)	1 (1.3)	19 (24.4)
国頭	14	3	6	2	-	3
中頭	23	4	13	3	-	3
那覇	10	-	6	1	-	3
島尻	14	2	4	3	-	5
宮古	7	-	2	1	-	4
八重山	10	-	7	1	1	1

() %

4) 保育領域の履修形態

保育領域の履修のさせ方は、「男女共に履修」が55.2%で過半数を占めているが、「女子のみ」に履修させているのも44.8%あった。

改定前の学習指導要領では、男子と女子で履修の範囲が異っていたが、現行の学習指導要領では男女同一の取り扱いとなっている。また、家庭の機能の変化等に対応するため新しい領域として「家庭生活」を設け、家族の生活、家庭の経済、家庭の仕事などに関する実践的・体験的な学習を通して、自己の生活と家族の生活との関係について理解させ、家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度の育成を目指している。この観点からみて家庭生活は男女で築いていくものであり、保育領域も男女共に履修させることが望ましいと考える。

表 8-2 保育領域の履修形態 (中学・保育)

総数	総数 87 (100.0)	はい 48 (55.2)	いいえ 39 (44.8)
国頭	16	9	7
中頭	25	16	9
那覇	11	5	6
島尻	16	5	11
宮古	7	2	5
八重山	12	11	1

数字=実数

5) 保育領域の学習形態

保育領域の学習形態をみると、「男女別学」の学習形態が59.8%で多く、「男女共学」は39.0%であった。4)の履修形態を反映して、保育は女子に必要な領域との意識が伺える。

表 8-3 保育領域の学習形態 (中学・保育)

総数	総数 82 (100.0)	男女共学 32 (39.0)	男女別学 49 (59.8)	一部共学 1 (1.2)
国頭	16	3	12	—
中頭	22	9	13	—
那覇	10	4	4	—
島尻	14	4	10	—
宮古	8	2	5	1
八重山	12	10	2	—

数字=実数

3. 保育領域における実習及び体験学習の実態

1) 遊具について

(1) 遊具製作の有無及び製作品

遊具の製作実習を取り入れているのは、69.0%で約7割近くを占めている。製作品としては、最も多いのが「動物のぬいぐるみ」で27人、次いで「絵本」25人、「パズル」19人、「ボール」18人、「お手玉」15人、「紙芝居」「人形」「サイコロ」各7人、その他、紙(竹)トンボ、ゴムてっぼう、水てっぼう、てまり、廃品利用のおもちゃ、カラカラ三味線等数多くの作品が上げられているが、中には、保育領域の製作実習の面からみると検討を要するのもあった。

表 9-1 遊具の製作の有無 (中学・保育)

総数	総数 87 (100.0)	はい 60 (69.0)	いいえ 27 (31.0)
国頭	16	9	7
中頭	24	18	6
那覇	11	10	1
島尻	16	10	6
宮古	8	5	3
八重山	12	8	4

数字=実数

(2) 遊具の製作について

遊具の製作は、「普通の授業」で行っているのが56.2%で最も多かった。次いで、「夏休み」の課題にしているのが20.6%、「授業と夏休み」8.8%の順で、ほとんどの教師が普通の授業の中で製作させている。

表 9-2 遊具の製作について (中学・保育)

総数	総数 68 (100.0)	普通の授業 45 (56.2)	夏休み 14 (20.6)	授業と夏休み 6 (8.8)	その他 3 (4.1)
国頭	8	5	3	—	—
中頭	20	13	4	2	1
那覇	10	6	2	—	2
島尻	11	8	1	1	1
宮古	8	4	2	—	2
八重山	11	9	2	—	—

数字=実数

(3) 遊具製作における地域素材の導入の有無

地域の素材を取り入れているかをみると、「取り入れている」は10.2%の約1割でほとんどの教師は取り入れているいない。

実習作品としては、自然物を利用した「松ボックリの人形」「わら人形」「アダン葉の風車」「ふくぎの葉のゾウリ」「砂糖きびの葉のささ舟」「ジュジュ玉の首飾り」「そてつの葉の虫籠」「ソテツの実の笛や飾り」「花の首飾り」等であった

表9-3 遊具製作で地域素材導入の有無(中学・保育)

総数	総数 88 (100.0)	取り入れている 9 (10.2)	取り入れているいない 79 (89.8)
国頭	16	—	7
中頭	25	3	22
那覇	11	2	9
島尻	16	1	15
宮古	8	2	6
八重山	12	1	11

数字=実数

(4) 郷土の遊具を教材として指導したか

郷土の遊具を教材として取り上げているのは、著しく少なく11.4%、国頭、八重山は皆無であった。また、取り入れている場合の作品としては、自然物を利用した「ソテツの葉の虫籠・花瓶・」「アダンの葉の虫・馬・風車」等の簡単なものから「沖縄のてまり」が上げられている。これらの郷土の遊具の指導には、時間数を要するのもあり選択教科の「刺しゅう」との乗り入れを検討しているとの回答もあった。また、地域の老人学級、退職教員等の導入活用も考慮しているのもあった。

表9-4 郷土の遊具を教材として指導したか(中学・保育)

総数	総数 88 (100.0)	指導している 10 (11.4)	指導していない 78 (88.6)
国頭	16	—	16
中頭	25	6	19
那覇	11	1	10
島尻	16	2	14
宮古	8	1	7
八重山	12	—	12

数字=実数

(5) 郷土の遊具指導で地域の老人活用の有無

郷土の遊具指導で地域の老人を招いて指導を受けたことがあるのは、著しく少なく7人で10.6%であった。実施しているのは、中頭、那覇、宮古の3地区であった。また、指導形態としては、すべて老人を学校へ招いての指導であった。

老人に学んだ作品としては、ほとんどが自然物を利用したものである。たとえば、「すすきの穂、マーニ、アダン、ソテツ」を利用して、「ふくろう、馬グワ、風車、時計、ボール、竹とんぼ、虫籠、ハブグワ、ぞうり、ほうき」等や「水テッポウ」「竹馬」「お手玉」などの伝統的な作品が多い。

中には、老人ホームへいく、ボランティア委員が老人から習って作ったものを発表させている学校もあった。

このように、地域の老人から学ぶことは、単に、古いものの作り方を学ぶというだけでなく、老人との交流を通して地域の文化を伝承する面からも大切なことである。

表9-5 遊具製作での地域の老人の活用(中学・保育)

総数	総数 66 (100.0)	はい 7 (10.6)	いいえ 59 (89.4)
国頭	10	—	10
中頭	18	2	16
那覇	9	1	8
島尻	13	—	13
宮古	7	2	5
八重山	9	2	7

数字=実数

(6) 製作した遊具の活用方法

遊具の活用方法としては、「幼稚園に持って行って一緒に遊んだ」が多く32.8%、「その他」27.9%で親戚や近所の子どもにあげたとなっている。「生徒個人でもっている」26.2%、「学校で保管」13.1%であった。

保育学習における実習作品の活用方法は、実際に子ども達との交流に用いることによって、子どもへの理解が深まり実習の趣旨が生かされるわけで、生徒のための遊具製作ではないのである。

表9-6 製作した遊具の活用方法(中学・保育)

総数	総数 61 (100.0)	学校で 8 (13.1)	幼稚園に 持ってい った 20 (32.8)	生徒個人 で 16 (26.2)	その他 17 (27.9)
国頭	6	—	3	2	1
中頭	19	1	10	4	4
那覇	10	1	2	4	3
島尻	11	4	1	2	4
宮古	4	—	1	1	2
八重山	11	2	3	3	3

数字=実数

2) おやつについて

(1) おやつ作りの実習の有無

おやつ作りは、多くの学校で実施され98.8%で著しく多い。

表10-1 おやつ作りの実習の有無(中学・保育)

総数	総数 83 (100.0)	はい 82 (98.8)	いいえ 1 (1.2)
国頭	16	16	—
中頭	24	23	1
那覇	11	11	—
島尻	15	15	—
宮古	6	6	—
八重山	11	11	—

数字=実数

(2) おやつ作りの指導時間

おやつ作りの指導時間は、4~6時間が48.1%で多く、次いで2~4時間35.4%、6~8時間11.4%、8時間以上が3.8%であった。

表10-2 おやつ作りの指導時間(中学・保育)

総数	総数 79 (100.0)	1時間 未 満 1 (1.3)	2~4 28 (35.4)	4~6 38 (48.1)	6~8 9 (11.4)	8~ 3 (3.8)
国頭	16	1	9	4	1	1
中頭	23	—	5	15	3	—
那覇	10	—	4	4	2	—
島尻	14	—	5	8	1	—
宮古	6	—	3	1	1	1
八重山	10	—	2	6	1	1

数字=実数

(3) おやつの実習

おやつの実習では、カップケーキが69.9%、クッキー55.4%が目立って多い。次いで、お好み焼き20.5%、ミルクゼリー、カスタードプディングが各々12.0%であった。その他、蒸しケーキ、フルーツケーキ等のケーキ類の実習も多かった。

表10-3 おやつの実習(中学・保育)

	総数 83 (100.0)	カップ ケーキ 58 (69.9)	クッキー 46 (55.4)	お好み 焼き 17 (20.5)	ミルク ゼリー 10 (12.0)	カスタード プディング 10 (12.0)	カステラ プディング 6 (7.2)	ロールサンド イッチ 5 (6.0)	その他 33 (39.8)
国頭	16	10	9	4	2	3	2	1	4
中頭	23	19	15	4	3	—	1	—	12
那覇	11	11	5	2	—	2	—	—	5
島尻	15	6	7	1	1	2	—	—	6
宮古	7	5	4	1	—	—	1	1	3
八重山	11	7	6	5	4	—	2	3	3

数字：実数複数回答

(4) 郷土のおやつ指導の有無

郷土のおやつを指導しているのは、47.0%で半数近くが取り入れている。取り入れているものとしては、最も多いのが「チンビン」「ポーポー」「サーターアングギー」「くずもち」が目立っている。その他パパイゼリー、やまいもカステラ、三月菓子、田芋パイ、ウムニー、ヒラヤチー、ティボンボン（餅粉、さとう、さつまいもをこねて手の平でボンボンと形を整えて揚げたもの）紅芋菓子等の外、中身汁、そば等のおやつとしてはどうかと思われるものもあった。また、サーターアングギーなどは中学生の題材としては技能的に無理ではないかと思われる。

表10-4 郷土のおやつについて（中学・保育）

総数	総数 85 (100.0)	取り入れている 40 (47.1)	取り入れていない 45 (52.9)
国頭	15	5	10
中頭	24	11	13
那覇	11	6	5
島尻	16	5	11
宮古	7	4	3
八重山	12	9	3

数字=実数

3) 体験学習について

(1) 幼児観察や体験学習の実施

幼児観察や体験学習を実施しているのは、53.8%で過半数の学校で実施している。

表11-1 体験学習について（中学・保育）

総数	総数 80 (100.0)	実施している 43 (53.8)	実施していない 37 (46.3)
国頭	15	9	6
中頭	24	14	10
那覇	9	5	4
島尻	15	7	8
宮古	7	4	3
八重山	10	4	6

数字=実数

(2) 体験学習の方法

体験学習の方法としては、「生徒各自で観察」が29.3%で多く、これは、生徒各自近所の幼児を課題を持って観察し報告をする方法である。次いで「グループ別」27.6%で、クラスの生徒をいくつかのグループに分け、それぞれ異なったテーマで取り組ませる方法である。「保育所見学」20.7%の3つの方法が目立って多かった。

全体的にみて、「保育所実習」「幼稚園実習」など実際に幼児とふれあう体験学習は少なかった。実習を通しての体験学習は、学校の近くに保育所や幼稚園などの施設があれば普通の授業の中に位置づけることが容易であるが、近くに施設が無い場合は、夏休み等を利用してぜひ取り入れて貰いたいものである。

表11-2 体験学習の方法（中学・保育）

総数	総数 58 (100.0)	各自で 指導 17 (29.3)	保育所 見学 12 (20.7)	保育所 実習 5 (8.6)	幼稚園 見学 4 (6.9)	幼稚園 実習 4 (6.9)	グループ 別 16 (27.6)
国頭	13	6	1	4	-	-	2
中頭	14	3	4	1	1	2	3
那覇	9	4	1	-	1	1	2
島尻	9	1	3	-	-	1	4
宮古	6	1	2	-	1	-	2
八重山	7	2	1	-	1	-	3

数字=実数

(3) 体験学習の実施時期

体験学習の実施時期をみると、「授業の中」が最も多く50.0%、「長期の休み」30.8%も多く、「放課後」13.6%、「土曜日」5.8%の順であった。

表11-3 体験学習の実施時期(中学・保育)

	総数	長期の 休み	放課後	土曜日	授業中
	52 (100.0)	16 (30.8)	7 (13.6)	3 (5.8)	26 (50.5)
国頭	13	7	1	—	5
中頭	10	3	1	—	6
那覇	8	4	1	—	3
島尻	9	1	1	1	6
宮古	5	—	1	1	3
八重山	7	1	2	1	3

数字=実数

表12 高等学校「保育」領域理解の有無(中学・保育)

総数	総数		十分知っている		十分とはいえない	
	87 (100.0)	16 (18.4)	49 (56.3)	22 (25.3)		
国頭	16	11	5	—		
中頭	25	4	16	5		
那覇	11	—	8	3		
島尻	15	1	10	4		
宮古	8	—	5	3		
八重山	12	—	5	7		

数字=実数

(4) 幼児観察等の体験学習以外の校外学習の有無

既述の体験学習以外の実習としては、次のようなものが上げられていた。

- ① 中2の進路指導の一環として職場訪問実習を保育所で実施
- ② 産婦人科病院で実習
- ③ 産院見学
- ④ 児童センター、児童公園等
- (5) 保育学習で使用している視聴覚教材

保育学習で使用される視聴覚教材としては、ビデオが多かった。最も多いのは『幼児の発達』に関するもので、「さくらんぼ坊やシリーズ」「幼児の心身の発達」「山下家の五つ子ちゃん」「一人できる」等であった。次いで『生命の創造』に関するもので「生命の誕生」「妊娠と出産」「受胎の神秘」「十代の妊娠」「胎内からの出発」等、次は、『生活習慣』、つづいて『幼児の生活(遊び)』で「遊びと友達」「幼児の生活と遊び」、その他、絵本、写真、狼に育てられた子、イギリスのある家庭生活等であった。数多くのビデオ教材が上げられているが、中学校段階の保育領域の資料としては検討を要するものもあった。

4. 高等学校「保育」領域の理解

高等学校の「保育」領域の理解をみると、「十分知っている」と答えたのは、18.4%で2割近くを占め、「十分とはいえないが知っている」は56.3%で過半数を占めているが、「知らない」も25.5%であった。全体的に高等学校の保育領域に対する理解度は低かった。

5. 中・高一貫性の観点に立つ指導の有無

中・高一貫性の観点に立って指導していると答えたのは35.7%で、いいえが42.9%で4割強を占めていた。分からないと答えたのも21.4%みられた。現在、各教科において小・中・高の一貫性の観点に立つ指導が求められているが、今一度、このことを再検討する必要があるのではないだろうか。家庭科教育の目指す「生活の自立」を図るためには、各学校段階で押さえるべき基礎的・基本的事項を十分に習得させる必要がある。

表13 中・高一貫性の観点に立つ指導の有無(中学・保育)

総数	総数			
	84 (100.0)	30 (35.7)	36 (42.9)	18 (21.4)
国頭	16	6	6	4
中頭	23	13	5	5
那覇	11	3	6	2
島尻	15	5	7	3
宮古	8	2	5	1
八重山	11	1	7	3

数字=実数

6. 保育領域の指導で困難な点

指導上の困難な点としては、多くの意見が出されているが、これを意見の多い順にまとめると次のとおりであった。

1) 指導法に関する問題

- ・男女共学での保育の指導は難しい。女子のみの場合は具体的な指導ができた。
- ・教師自身が子育ての経験がないので、生徒の質問に適切に答えられない。
- ・命の大切さ、性の問題など、生む性、育てる母性を自覚させられるか、現状では保育以前に女性の生き方を考えさせないといけないと思う。
- ・保育学習に興味・関心を示さない、特に、男子に意欲・関心を持たせるのが難しい。
- ・学校の近くに保育所や幼稚園がなく、体験学習ができない。
- ・保育の授業（教科書の内容）と実際の幼児との違い、即ち個人差があり保育実習で戸惑う面が多々あった。
- ・中学3年になると、学習塾へ通う生徒が多く放課後等の時間確保が難しい。

2) 設備面の問題

- ・資料が少ない。
- ・ビデオ等の視聴覚教材がなく、高価で入手しにくい。

以上主な点を上げたが、ほとんどの教師の意見は指導上の困難さを訴えるものが多かった。

IV 要約

沖縄県における中学校技術・家庭科保育領域の指導の実態について述べてきた。その結果を要約すると次のとおりである。

1. 基本的属性：家庭科の免許の所持率は71.6%であるが、免許外が28.4%の3割近くを占めている。免許外教科の担当問題は、家庭科の免許を持たない教師が家庭科を教えている場合と家庭科の教師が免許のない他の教科を教えている場合があって、国語、音楽、英語、数学、社会等で離島や僻地の小規模校に多い。

身分は教諭が多く85.1%、経験年数は、全体的には16年以上が51.7%が多いが八重山では経験年数の短い教員が多い。年齢は、50代が40.0%で多く、全体的に都市地区は年齢が高く、離島や国頭地区は低い傾向にあった。

2. 家庭科の指導の実態

① 家庭科の指導体制：「1人で指導」してい

るのが59.6%が多いが、免許外教科の担当も25.0%みられた。

- ② 保育領域の履修学年：3学年での履修が97.3%を占めていた。
- ③ 保育領域の授業時数：全体的には、20～25時間が48.7%で多く、妥当な時間配当をしているが、中には19時間以下もあり検討を要するところもあった。
- ④ 保育領域の履修形態：男女共に履修が55.2%が多いが、女子のみに履修させているところも44.8%もあり、女子のみでは現在の家庭科教育の趣旨に沿わないので検討が必要である。
- ⑤ 保育領域の学習形態：「男女別学」が59.8%で最も多く、「男女共学」は39.0%で先の履修形態を反映した結果となっている。

3. 保育領域における実習及び体験学習の実態

1) 遊具について

- ① 遊具製作の有無と製作品：遊具の製作を取り入れているのは69.0%で、「動物のぬいぐるみ」「絵本」「パズル」「ボール」「お手玉」等が多い。
- ② 遊具の製作実習の方法：「普段の授業で」実施しているのが多く56.2%、「夏休み」20.6%である。
- ③ 地域の素材導入の有無：取り入れているのは10.2%と低率である。導入している素材としては、自然物を利用した「松ボックリの人形」「わら人形」「アダン葉の風車」「ふくぎの葉のゾウリ」等である。
- ④ 郷土の遊具を教材として指導：教材として導入しているのは11.4%と低い。
- ⑤ 郷土の遊具指導で地域の老人の活用：活用したのは、10.6%で、ほとんどが自然物を利用した、風車、時計、竹とんぼ、ぞうり、ほうき等の伝統的なものである。
- ⑥ 作品の活用方法：「幼稚園、親戚、近隣の子あげた」が6割以上を占めている。

2) おやつについて

- ① おやつ作りの実習の有無と指導時数：おやつ作りは98.8%が実施している。指導時数は、4～6時間が多く48.1%、2～4時間35.4%である。

② おやつの実習：カップケーキ69.9%、クッキー55.4%が目立って多い。

③ 郷土のおやつ指導の有無：指導しているのは、47.0%で「チンピン」「サターアンダギー」「ポーポー」「くずもち」が多いが、「サターアンダギー」などは、中学生の題材としては技能的に無理ではないかと思われるのもあった。

3) 体験学習について

① 体験学習の実施：実施しているのは53.8%で過半数の学校で実施している。

② 体験学習の方法：「生徒各自で観察」が29.3%、「グループ別」27.6%、「保育所見学」20.7%で生徒各自での観察学習が多く、「保育所実習」「幼稚園実習」等の実際に幼児とふれあう体験学習は少ない。

③ 体験学習の実施時期：「授業の中」が多く50.0%、「夏休み」30.8%が目立って多い。

④ 体験学習以外の校外実習：進路指導の一環として職場訪問実習を保育所で実施、産婦人科病院での実習、産院見学、児童センター、児童公園等があった。

⑤ 保育学習で使用している視聴覚教材：ビデオ教材が多く、特に「さくらんぼ坊やシリーズ」「幼児の心身の発達」等であった。

4. 高等学校「保育」の領域理解：「十分知っている」は18.4%、「十分とはいえないが知っている」56.3%であるが、「知らない」も25.5%あり理解度は低い。

5. 中・高一貫性の観点に立つ指導：一貫性の観点に立つて指導しているのは35.7%、「いいえ」「わからない」が6割り以上を占めている。基礎・基本の定着を図り指導の効果を上げるには、各学校段階の指導内容を見通した指導の姿勢が求められる。

6. 保育領域の指導で困難な点

1) 指導法に関する問題：「男女共学で具体的な指導は難しい」「保育学習に関心がない」「体験学習がやりにくい」等である。なかには、「生む性、育てる母性」をどれだけ自覚させられるかを上げているが、これは技術・家庭科での保育領域の指導の「程度と範囲」を越えており、今一度、発達段階に即した保育領域の指導のねらいを確認する必要があるのではないだろうか。

2) 設備面の問題：資料が少ない、ビデオ等の聴覚教材が少なく、高価で入手しにくい等が上げられているが、地区別に、グループで教材開発をするなどの取り組みである程度の解決ができるのではないと思われる。

謝辞本研究をまとめるにあたり、お忙しいなか調査にご協力くださいました、沖縄県の中学校技術・家庭科担当の先生方に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 文部省 中学校指導書一技術・家庭編 開隆堂 昭和57年
- 2) 岡村 喜美編 家庭科教育の研究 学芸図書 昭和53年
- 3) 文部省 中学校指導書一技術・家庭編 開隆堂 平成4年
- 4) 宜保美恵子、亀谷末子「沖縄県における家庭科教育の実態—小学校第5年の場合— (第1報)」琉球大学教育学部紀要 第50集 1997
- 5) 文部省 中学校指導書 技術・家庭編 開隆堂 平成元年
- 6) 前掲書 5)